

高校生が主体的にコミュニケーションをとることができるための能力育成に関する実践研究

松本宗久 (大阪学院大学高等学校)

<概要> 大阪私学教育情報化研究会では2003年から ICT プロジェクトと銘打ち、主に大阪府下の私立高校の生徒を中心とした有志が集まり、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の向上を目的とした勉強会を開いてきた。年月を重ね実践を増やすことで、内容を工夫・向上させた。結果、生徒の能力向上をみることができ、また参加した教員や教員志望の大学生に対する研修となるなどの成果も得ることができるようになった。今回は、主として2009年度の実践とその狙いを中心に報告する。

<キーワード> 情報教育、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、教員研修

1. 本プロジェクトについて

ICT プロジェクト (International Communication Technic Project) は、『高校生の情報化と国際化に対応できるコミュニケーション能力育成に関する実証研究』として2003年度から、大阪私学教育情報化研究会主催で開始され、今年度7年目を迎えるプロジェクトである。

開始年度は、高等学校において、教科「情報」が必修科目として取り入れられた年度であり、教科「情報」において、何を教えればよいか盛んに議論されていた時期であった。そのため、実社会でプレゼンテーションが効果を持つためには基礎となるコミュニケーション能力の開発が前提となることが学校教育では見落とされがちととらえ、参加校から数名ずつの生徒を対象に、数回のセッションを行いプレゼンテーションの総合的な技能の向上を目指そうという企画として始まった。そして、プレゼンの中でコミュニケーションが果たす役割を多角的にとらえ、それぞれのセッションを通して段階的に「考える、まとめる、話す、見せる、伝える」などの技術を、レクチャーとワークショップで練習することに力点を置いている。一方開始当初から現在までの高校生の変化を指導教員の立場で見ると、プレゼンテーション能力は、中学校での総合の取り組みなどの成果により、向上しているが、巷間言われるようにコミュニケーション能力の不足を感じることも、逆に増えていると感じられる。そのため本プロジェクトも、徐々にそちらに力点がおかれるようになってきているのが現在の状況である。

2. 2009年度の各セッションについて

2009年度は都合4回のセッションを行った。セッションではホームルームティーチャー (以下 H.R.ティーチャー) と呼ばれる、全体をまとめる教員のもとで授業を行い、他の教員や OB がそれを援助するという形をとった。最後にまとめの発表会として、プレゼン甲子園を催した。以下ではそれぞれのセッションについて、簡単に説明する。なお参加校は (私立6、府立1) 上宮高校、大阪学院大学高校、清教学園高校、羽衣学園高校、初芝富田林高校、府立花園高校、プール学院高校で、男子校・女子校・共学校をすべて含んでいる多彩な組み合わせになった。また、生徒の参加数は、多いときは40名以上とここ数年では一番多くの参加者のいた年度となり、学校毎の参加者数変動はあったが、すべてのセッションにおいて、ほぼすべての高校が参加した。

第1回セッション 日時：6月13日 (土) 14:00~17:00

場所：プール学院高等学校 H.R.ティーチャー：上宮高等学校 池田竜司 先生

このセッションでは生徒同士のアイスブレイキングをかねて「色々な学校の人と仲良くなること」そして「前に立って、発表すること」ができるようになることを目標とした。まず、自己紹介をかねて、発表内容の書いてあるクジを引いて、その事について1分以内で話すという授業を行った。(例：「家に帰ると何をしますか?」「“ほっ” とするときはいつですか?」「大切な物はなんですか?」など) まだ慣れない

生徒も多く、発表にとまどう者も多かった。

休憩をはさんで、以前から交流のある東京の情報教育交流会の催しにスカイプを用いた TV 会議システムを通じて参加した。こうした交流は以前ほど珍しくはなくなっているものの、東京の高校生との交流はやはり楽しいようで盛り上がっていた。その後、異なる学校の生徒同士で班を組み、班員全員に“愛情のある”あだ名を、相手からいろいろ聞き出してつけてあげるという授業を行った。ここでのポイントは“愛情のある”ことであり、ネガティブな話題にならないように授業を進行させて行くということが、過去の実践事例から得た経験として活用された。途中、参加教員は、班の全員が協力して作業ができるように配慮を行うように努めた。

第2回セッション 日時：7月19日（日） 11:00～17:00（途中、昼食をはさむ）

場所：上宮高等学校 H.R.ティーチャー：大阪学院大学高等学校 松本宗久

このセッションでは、簡単な性格判断テストを用いて、異なる学校の生徒同士でチームを組み、「性格の違う者どうしが、チーム内で必ず役割を与えられ、共通の課題に対して協力して解決を行うこと」ができるようになることを目標とした。まず、性格判断テストを行い、教員がチームを振り分けている間に昼食をとってもらった。生徒が昼食をとっている間、教員は適宜その場に参加し、他校の生徒と会話をしたり、一人になっている生徒がいらないか注意するなどして、積極的に生徒とコミュニケーションをとるようにした。

昼食後、結成されたチーム内で、各自の役割を5つの係から選択する作業を行った後、2つの課題に挑戦してもらった。一つ目は「私の取扱説明書」と題し、自分のよい点を「効能」（例：任せられた仕事はいやなことでもしっかりやる）、注意点を「注意」（例：ほめられると失敗が多くなる）などの欄に記入していき、チーム内と全体に発表していき、互いの情報を共有することで、コミュニケーションを円滑に行えるようにした。二つ目は「ギリギリクエスト」と題し、参加者の中で0名にはならない質問を、だんだん該当者が減っていくように組み合わせで発表し、どのチームが一番多く質問できたかを競うゲームを行い、初めての仲間で協同して作業を行うことを体験させた。このセッションを通じて、司会係は発表を、記録係は原稿整理を、と与えられた係の役割をこなすことによって、どの生徒にも達成感を与え、自分にもできることがあるという自己肯定感を養うことを一つの目標としたが、生徒の反応もよくある程度達成できたと感じられる。

第3回セッション 日時：8月22日（日） 14:00～17:00

場所：プール学院高等学校 H.R.ティーチャー：OG（現在大学一年生）2名

（大阪学芸高等学校卒 秋山栞さん、大阪学院大学高等学校卒 坂本良子さん）

このセッションでは、今までになかった試みとして、研究会で事前指導を行った上で OG（昨年の参加者）が H.R.ティーチャーとなって、生徒を指導することとした。

まず、各グループに提示された筆箱を見て、その使用者がどのような人物かを探ってもらおう。その後、グループ毎に考えた人物像を発表してもらおう。このことで、分析する力を養うこととした。

休憩後、指導教員が渡された筆箱をわざと自分のものの振りをして話をする、という模範演技をしめし、まんまと騙された生徒たちに、もし提示された筆箱が自分のものであったらと仮定して、筆箱にまつわる自分の思いを発表する。このことで、想像力を養った。

最後に本当は誰のものなのか発表し、自分たちが考えたものとのギャップについて考えさせた。H.R.ティーチャーからは、発表の様子について、前で話をする時でも、友達同士の会話になっているので、そうならないように積極的に前に出て話す訓練を少しずつ重ねよう、というまとめが行われ、次回セッションへの布石とした。反省会では、昨年は生徒、今年是指導者という立場の違いから色々な事を学べ、また後輩に伝えることができたとの意見が出、今後セッションが続いていく場合に、卒業生の力を借りて、皆がより有益に学べるようにしようとの認識で一致した。

第4回セッション 日時：9月26日（土） 14:00～17:00

場所：大阪府立花園高等学校 H.R.ティーチャー：大阪府立花園高等学校 村上 徹 先生

多くの生徒が初めて公立高校を訪れるという経験と共に、魅力的で情報が効果的に伝わるプレゼンテーションをするための7つの法則の発見と、プレゼンテーションソフトを用いた発表の練習を目標にセッ

ョンを行った。

まず、新入生に対して「自分の学校の注意点」の説明を20分で考えてプレゼンすることが行われた。生徒にとっては、注意点を「生活指導上、どのようなことを注意されるか」と解釈した者が多かったようで、例えば「遅刻を三回繰り返すと、早朝指導がある」などの事例が発表された。こうした発表を通じて、「伝えたいことをはっきりさせる」「前後のつながりをきちんとする」「聞き手のことを第一に考える」という、プレゼンの基礎事項について指導が行われた。

次に「3つの法則（プランニングの法則・スライドの法則・スピーチの法則）」というカテゴリごとに3枚の台紙に思いつく法則を付箋紙に書いて貼っていき、その後似ているものごとに分類する、それと同時に「10-20-30の法則」（10枚のスライドを20分かけてしゃべり、30ポイント以上の大きさを使ってプレゼンをする）を解説し、生徒にプレゼンテーションについてより深く考えさせた。最後に、各校が法則毎に一つ、代表的なものをそれぞれ発表し、最後に教員が審査して、各校から一つずつ大切なことを選び、「大阪ICTプロジェクトの七つの法則」として、プレゼン甲子園での発表にいかそう、とセッションをまとめた。

プレゼン甲子園 日時：11月1日（日）13:00～17:00

場所：大阪学院大学 2号館 地下1階



これまでの総まとめとして、学校単位で与えられたテーマに関して、プレゼンテーションソフトを用いて約8分間のプレゼンテーションを行った。今年のテーマは「世の中を動かすために、私は〇〇な会社の社長になる！」とした。指導教員の話し合いで、今年の生徒は熱意もあり優秀であるので、少し難しいテーマを設定した。また羽衣学園高校が学年ごとに2チームの編成となったので、合計8つの発表があった。また本年度は産経新聞からの取材を受け、関西版の夕刊の教育欄に、本活動の事が掲載された。

各校それぞれに工夫を凝らしたアイデアで発表を行っており、汲まずして学校のカラーが出るような発表になっていたと思う。また、セッションを通じて他校の生徒のこともよく知っていることから、どこかの学校だけ飛び抜けていい発表をしているということがなく、全体が底上げされていることも、本プロジェクトの特徴と言えるかもしれない。それぞれが考えた会社は以下の通りである。

- 「失業者に社会活力に貢献してもらおう『フードチェーン店』」（羽衣学園高校1年生チーム）
- 「不安の解消と心のケアを目指す『スマイル・カンパニー』」（府立花園高校）
- 「月で食糧の増産を計画する『宇宙開発公社』」（初芝富田林高校）
- 「水不足を改善するための『水の循環システムの再構築会社』」（清教学園高校）
- 「ストレス社会の問題を解決する『リフレッシュ・カンパニー』」（上宮高校）
- 「旅行費用の一部をアジア各国の問題解決に役立てる『旅行会社』」（羽衣学園高校3年生チーム）
- 「国内の農業自給率を高めるためにゲーム方式で野菜を育成する会社」（プール学院高校）
- 「クローン技術を活用し、食糧危機の改善や医療技術を発展させる会社」（大阪学院大学高校）

自分が指導にあたった関係で、大阪学院大学高校の発表準備についても触れたい。準備期間を一週間ほどだったが、最初はあまり進むこともなく、会社内容の決定も二転三転した。この期間にも生徒間でも仲たがいが起こるなど不安になることもあったが、今までのセッションの成果で、最後には協力して作業を行っていた。発表前日はビデオ撮影をしてそれを振り返りながら最終の作業を行った。昨年参加したOBが主体となって指導を行ってくれたことが、生徒にも刺激となったようだ。この段階では夜遅くまで作業

を行ったにも関わらず、必ずしも満足のいく出来ではなく、本番に向けて不安が残った。しかしそれは杞憂に終わり、当日は一緒に指導してくれた OB 達も驚くほどしっかりとプレゼンをしてくれたので、改めて生徒たちの成長を感じることができた。

後日本校生徒は、産経新聞の記者からインタビューを受けた。その際は学校生活では見ることのなかった堂々とした話しぶりであり、記者も感心された。私も「この生徒たちの話し方こそ、セッションの成果です」と自信を持って言う事ができた。

3. 教員研修としての側面

本プロジェクトは、教員及び、教員を志す学生にとってもよい研修となっており、過去に参加した学生で実際に教壇に立つものも現れており、研修としての成果が目されるようになった。その原因を考えると、セッション中では参加教員も傍観者ではなく、指示されれば生徒と同じことをすることで、内容をより実践的に学べる事、また本研究会の他の取り組みと同様、セッション終了後も教員は残って必ず振り返りを行い、その中で教員間で率直に疑問をぶつけあう事、加えてその後懇親会を設けることで、さらに議論を深めていけるためなどがあげられると思う。また各セッションを記録し、Web 上で公開することで、参加できなかった者でもその様子を参照できるように工夫をしており、記録を利用して授業実践を行う教員もいた。

4. まとめ

私学の生徒が、他校の先生に授業を受ける機会はかなり少ない。この事が、この取り組みを更に意義あるものとして感じられる。今年は生徒が多数参加して盛りあがった反面、教員の参加者が少なく運営が大変な面があった。一方で OB が H.R.ティーチャーや、Web 作成に積極的に参加してくれるようになってきたので、今後はそれを活かし、教員、学生が協同してよいプロジェクトができるように努力していきたいと考えている。また、東京のプレゼンピックとの交流では、互いのよい面を双方が取り入れることで成果をあげており、今後とも他の研究会やプロジェクトとの交流も進めていきたいと考えている。

全体を振り返ると、今年度は、各セッションにおいて、コミュニケーション能力については、授業内容を通じて向上できるよう意識して工夫をした一方で、プレゼンテーション能力については、必ず口頭発表を取り入れることで、自然と向上するように工夫することができたことがよかった。しかし、個々のセッション自体はそれぞれ意味のある内容の濃いものになったが、全体としての関連性が希薄であったように思われるという意見もあり、来年度はその辺りを改善してプロジェクト全体を、よりまとまったものにしていこうということになった。総じてモチベーションの高い生徒が集まってきていることもあり、彼らが「面白い」ではなく、厳しいことも多いが「楽しい」と感じられるプロジェクトになるよう今後も努力していきたいと参加教員一同は考えている。

謝辞

本プロジェクトを行うにあたり、設置した研究会のメンバーをはじめ、セッションに参加してくれた先生、OB・OG、会場を貸して下さった各学校、有益な交流ができた東京の研究会の先生、そして何よりもセッションに参加してくれた生徒の皆さんのお陰で本研究を行えたことを、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 表現の汗をかけ プレゼン甲子園2003, じっきょう情報教育資料別冊, 実教出版
 石部睦雄(2007)『高校生の情報化と国際化に対応できるコミュニケーション能力育成に関する実証的研究』, 日本私学教育研究所紀要第42号(2)教科篇, 165-179
 松本宗久(2009)『大阪私学教育情報化研究会による高校生のプレゼンテーションおよびコミュニケーション能力育成のためのプロジェクトについて』, 日本教育情報学会第25回年会論文集, 382-383

本プロジェクトの参考となる Web ページ

- 大阪私学教育情報化研究会 ICT プロジェクト Web ページ <http://www.osaka-sigaku.net/ict/index.htm>
 産経新聞(関西版 教育欄)掲載記事 「プレゼン甲子園」今年で7年目
<http://www.sankei-kansai.com/2010/02/01/20100201-020007.php>